

# 「新救貧法」(1834)と *Oliver Twist*

西 條 隆 雄

## 1 「新救貧法」に対する国民感情

規定によるうすい粥をあっという間にたべ終ると、子供達はひそひそささやき、*Oliver* に目くばせし、隣の子供が彼の肘をつついた。彼は立ち上り、救貧院長のところへ歩みより、“Please, sir, I want some more.”<sup>1</sup> とか細い声で嘆願をした。それがどのような恐ろしい結末を引きおこすか、ほとんどわかりもせぬままにである。

餓死寸前のいたいけな子供が口にする、この、生存のぎりぎりの要求は、時代、民族をこえて、あまねく心ある人々に強く訴えるところとなった。人物とシチュエーション、そして背後にある功利思想の設定は絶妙である。26歳の新進作家の第二作は、第一作につづき熱狂的な歓迎のうちにはじまった。素材は1834年に制定され実施された「新救貧法」であり、当時、これをめぐって賛否両論のうずまく中で、Dickensは一貫して弱者、虐げられた人々の擁護にまわっている。作家のこの立場は、個人的経験と無関係ではありえないが、ここでは新法をめぐる様々な国民感情と*Oliver Twist*との関係を明らかにしたいと思うのである。

例えば、*Oliver Twist*の出版された1837年には次のような俗謡がはやった。

### The Workhouse Boy<sup>2</sup>

The cloth was laid in the Workhouse hall,  
The great-coats hung on the white-wash'd wall;  
The paupers all were blithe and gay,

Keeping their Christmas holiday,  
 When the Master he cried with a roguish leer,  
 "You'll all get fat on your Christmas cheer!"  
 When one by his looks did seem to say,  
 "I'll have some more soup on this Christmas-day."  
     Oh the Poor Vorkhouse Boy, etc.

At length, all on us to bed vos sent,  
 The boy vos missing—in search ve vent:  
 Ve sought him above, ve sought him below,  
 Ve sought him with faces of grief and woe;  
 Ve sought him that hour, ve sought him that night;  
 Ve sought him in fear, and ve sought him in fright,  
 Ven a young pauper cried "I knows ve shall  
 Get jolly vell vopt for losing our pal."  
     Oh the Poor Vorkhouse Boy, etc.

Ve sought in each corner, each crevice ve knew;  
 Ve sought down the yard, ve sought up the flue;  
 Ve sought in each kettle, each saucepan, each pot,  
 In the water-butt look'd, but found him not.  
 And veeks roll'd on;—ve vere all of us told,  
 That somebody said he'd been burk'd and sold;  
 Ven our master goes out, the Parishioners wild,  
 Cry "There goes the cove that burk'd the poor child."  
     Oh the Poor Vorkhouse Boy, etc.

At length the soup copper repairs did need,  
 The Coppersmith came, and there he seed,  
 A dollop of bones lay a grizzling there,  
 In the leg of the breeches the poor boy did wear!  
 To gain his fill the boy did stoop,

And, dreadful to tell, he was boil'd in the soup!  
And ve all of us say, and ve say it sincere,  
That he was push'd in there by an overseer.  
Oh the Poor Vorkhouse Boy, etc.

クリスマス・ディナーの特別食として、救貧院で濃厚なスープがふるまわれるという有難いはからいである。ところが実際には、一人の子供を鍋の中で煮込んだスープであったという、残酷な内容の俗謡である。人命の軽視、救貧院長 (master) の非人間性、そして教区民生委員 (overseer) の殺人行為が淡々と語られている。この俗謡は、*Oliver Twist* の第一分冊が出てすぐあとに書かれたものと思われるが、救貧院のあまりに非人道的な運営を憤る民衆の抗議の声は、この俗謡の場合のように、機会があれば触発せぬばかりに、津々浦々に充満していたと考えられるのである。

「新救貧法」は、10マイル内の教区を統合して 'union' とし、従来各教区ばらばらに行われていた貧民救済を国家レベルの統一基準のもとにおき、それによって経費節約と様々な悪弊をなくそうとしたものである。統一の救済策をめざす中で、子供に対する配慮はあとまわしになり、食事、衣服もさることながら、精神的形成にいたってはほとんど手がゆき届かなかった。Oliver は9歳になるまで養育院 (farm) に預けられていた。そこでは食事を与えられなくて死んでしまったり、折りたたみベッドにはさまれて窒息死したり、体に煮え湯をかけられて死んでしまうといった過失致死が、さしたる責任もとわれずまかり通っている (II, 5)。“Baby Farming”<sup>3</sup> と題する俗謡には、Brixton でおこった実話が語られている。それによると、二人の姉妹がある母親から2、3ポンドお金を受けとって不義の赤ん坊の養育を引きうけたが、実際は食物を与えず、体を洗ってもやらず、床にころがしておいて死ぬにまかせ、その遺体を原っぱに投げすてていたという内容である。farming は “scandalous trade” であると断じている。母親への警告と、社会抗議の声が混ざっている。

Oliver の養育院においては、教区より頭数あたり週7.5ペンスが支払われているが、養育院長は、馬を一日藁一本たべさせて生き永らえさせるべく訓練する“experimental philosopher”であり、上記俗謡の二人の女性と考えるところはさじてかわらない。命こそながらえたものの、Oliver は“a pale thin child, somewhat diminutive in stature, and decidedly small in circumference” (Ⅱ, 5) となって9歳を迎えたのであった。その9歳というのが教区で徒弟に出す最低の年齢である。そして徒弟に出すには、徒弟契約書を充分に照合し、二名の判事の裁可をうけることと決められている。

粥のおかわりを求めたゆえに暗室にぶちこまれたのち(救貧院長、「新救貧法」に対する反抗は24時間以内の禁固ののち判事の前に引き出されることになっている)、Oliver は煙突そうじ人の徒弟に出されることになった。しかし、からくも蠢礫判事の目が彼の恐怖に引きつる顔に出合い、Oliver にその理由を尋ねると、彼は Bumble 氏のおどしとつねりをものともせず、「このこわい人と一緒に送り出すことだけはしないで下さい」と哀願した。これは認められた。規定にそう書かれているのである。

...the justices shall inquire of the boy whether he is willing and desirous to follow the business, and if he may not, they shall not sanction the binding.<sup>4</sup>

しかし、法や規定はこれを運用する人間次第であることは、いつの世においても同じである。万一判事の目が Oliver の顔に出合うことなく、そのまま徒弟として送り出されていればどうなっていたであろうか。次の例は1839年の警察調書<sup>5</sup>からとられたものである。

Robert Towser なる煙突そうじの親方が12歳の Arnold 少年を雇っていた。パン屋の台所の煙突がもえ出したというので呼ばれた彼は、すぐさま少年を鎮火させるために、もえる煤のおちてくる中を煙突の中に送りこんだ。パン屋が、危いから止めろという親方は“Oh d—n it, I've many a time

been up a chimney ten times worse than that, and why can't he do it?" とのべる。パン屋は二階に上って煙突の中に水をなげ入れようとしたところ、煙突の中から「お願いします。煙突のかぶせをとりのけて下さい」とか細い声がきこえた。彼は急いでとりのけ、半死半生の少年を引きづり上げたのである。ブランデーをのませ、しばらく休ませると少年は元気を回復したが、これをみるや親方は再び少年を上部から煙突に入らせ、やるべきをはたして下まで降ろし、しかるのち二人して帰路についたのであった。

Oliver が一目みてふるえ上った Gamfield の顔つきもさることながら、この煙突そうじ人の言葉は、こんな警察調書を目にすると、一字一句嘘いつわりのない事実に見えてくる。これまでに子供を何度か煙突の中で窒息死させた点をとがめられた時、彼はこう答えているのである。

"That's acause they damped the straw afore they lit it in the chimbley to make 'em come down agin. . . that's all smoke, and no blaze; vereas smoke ain't o' no use in making a boy come down, for it only sinds him to sleep, and that's wot he likes. Boys is wery obstinit, and wery lazy, gen'lmen, and there's nothink like a good hot blaze to make 'em come down vith a run. It's humane too, gen'lmen, acause, even if they've stuck in the chimbley, roasting their feet makes 'em struggle to hextricate theirselves." (III, 16)

この例のように、作品中のグロテスクにすぎるといえるような表現は、誇張であるとして片づけてしまうことはできず、ほとんどが事実をふまえたものであることがわかる。加うるに、“The Poor Law Catechism”<sup>6</sup> なるブロードシートも出版されている。そこにはこのような件がある。

Q. How many Commandments have you and such as you are to keep?

A. Ten.

Q. Which be they?

A. The same which the Poor Law Commissioners make in Somerset House, saying, We are thy lords and masters, who have caused thee to be confined as in bastiles, and separated thee and the wife of thy bosom, and the children of thy love. 1st, Thou shalt obey no laws but ours. 2nd, Thou shalt not make to thyself any substitute for skilley, nor the likeness of tea, or any other kind of food, or drink, except as is allowed in the workhouse; for we are very jealous men, punishing with severity any transgression against our laws. Should'st thou disobey in this, we shall teach you a lesson that shall last thee all the days of thy life.

「新救貧法」の実施に伴い、救貧院の収容者は囚人並に扱われ、人命は軽視され、残虐な行為が加えられることに対して、1830年代の後半には人民の様々な抗議、抵抗がはげしくなった。しかし、俗謡とかブロードシート、あるいは短命の定期刊行物の力では、それがいかに人民の苦しみを語っていようと、国政をゆるがす力にはなり得なかった。加えて、新法実施による国費節約は、実施前の3年間の平均額に比べ100万ポンド(46%)も減少する好成績をおさめ<sup>7</sup>、当時の知識人の間では好ましい評価を得ていたのである。ところが、こうした風潮の中で『タイムズ紙』は法案の審議中より一貫して、新法の非人道性に焦点をあて、反対の立場を表明しつづけていた。

『タイムズ紙』の社長 John Walter, II (1776-1847) は「新救貧法」の審議に際し、おおかたの予想に反し、下院で反対の意を表明した。これはたちまち『タイムズ紙』のとり上げるところとなり、内閣をあわてさせた。編集長の Thomas Barnes (1785-1841, 在任1817-1841) は、ペンの力によって新聞を国民の声を伝える独立機関に昇格させた人物で、彼は終生貧しい人々に同情をよせ、科学的な中央集権機構には不信を抱いていた。新法は真面目な貧民を囚人の地位につきおとし、ほんのわずかの給付で立直ることのできる者を永久に立直れぬ人間にかえてしまうという点を憂慮し、彼は「院外

給付」(outdoor-relief)の廃止を特に憎んだ。新法の草稿にたずさわった Senior は『タイムズ紙』の批判をたわ言として一蹴したが、紙上に掲載された様々な警告、脅迫は、やがて閣僚その他の議員に、それが選挙区民に与える悪影響を心配させはじめるのであった。

例えば、『タイムズ紙』の社説に激怒して我を忘れた閣僚の一人 Althorp 卿は、大法官の Brougham に私信を走り書きし、ある相談をもちかけるが、Brougham はこれを破りすてた。ところがある匿名の支持者がこれをつなぎ合わせ、こともあろうに『タイムズ紙』の編集長のもとに送り届けたのである。そこには「『タイムズ紙』との戦闘開始」を宣言すべきではないかと書かれていた<sup>8</sup>。言論弾圧の不快な例として、その複写は『タイムズ社史』の中に堂々と綴じられている。

一方 John Walter は、下院において国内の様々な残酷さと苦痛の例を次々と列挙し、孤立無援ながら新法攻撃の手をゆるめず、ついには実態の特別調査委員会の設置を動議し、1837年2月27日これを採択させた。そしてこの時から、国会では討論と調査が絶えずくり返され、各地では新救貧法反対のろしがあがり、集会、演説、そして新聞・冊子の発行が相ついだ。1837年から39年にかけて反対運動は最高潮に達し、トーリー党の機関誌である *Blackwood's Magazine* までが、救貧院は経費切りつめのために、「人皮ははぎ取ってなめし皮に、人骨はスプーンとフォークと柄杓に、そして人肉は栄養価の高いスープ作りに用いることを提案せねばなるまい」と提言した<sup>9</sup>。更には、冊子“A Book of Murder! by Marcus, One of The Three”が出まわり、貧民救済は子供の数をへらすことが最も肝要で、そのため子供は3人を最高とし、以降は、生まれおちるとただちに鼻から有毒ガスをふきこみ、この世の生を終らせるべきだと提唱した。‘one of the three’というのが‘one of the “Three Poor Law Commissioners”’であると受けとられ、冊子は数版、数千部を売りつくし、国中すみずみにいたるまで大嵐を引きおこした<sup>10</sup>。1838年2月には、「新救貧法」撤廃の動議が John Fielden によって出され

(309対17で否決)、この時は Disraeli も動議に賛成票を投じている<sup>11</sup>。彼は1837年の総選挙において、新法反対の演説をぶって当選したのであった。

こうした反対運動の激しさも、やがて特別調査委員会が、これまた John Walter の期待を裏切って、「新救貧法」は成功をおさめている旨の報告書を作成するにいたって、反対運動はより根本的な問題へと方向を転じていった。つまり、万人が選挙権をもてば、このような悪法は撤廃せうとの考えに傾き、チャーティスト運動の中に吸収されてゆくのであった<sup>12</sup>。

しかし Walter はこれにひるむことなく、独自の調査をあくまで続行し、ついに1846年、Andover 救貧院における醜聞を暴露し、Poor Law Commissioners の息の根をとめるのである<sup>13</sup>。そこでは、救貧院長の数々の破廉恥な行状と共に、あまりに厳しい食事制限ゆえに、肥料を作るための骨砕き労働にあたっている収容者が、悪臭にもかかわらず、きそいあって軟骨にむしゃぶりついていたのであった。この暴露は中央委員会内部への立入り調査を誘発し、1847年7月、独立機関として猛威をふるった Poor Law Commission はついに廃止においやられ、Poor Law Board と改名されて政府の一所属機関になり下ってしまうのである。新聞報道を武器に、苛酷で容赦なき「新救貧法」と闘いぬいた Walter の努力はようやく報われたかにみえた。だがその勝利を手にして一週間後、彼は71歳の生涯を閉じるのである。

## 2 事実と虚構

「新救貧法」は、Oxford 大学の初代経済学教授をつとめた Nassau Senior (1790-1864) と、Jeremy Bentham の個人秘書をつとめていた Edwin Chadwick (1800-1890) により起草された。若き Chadwick は前者の推挙もあり、成立後は3名の中央委員の一人になるつもりであったが、首相の Melbourne 卿は理論家を嫌い、かつ 'gentleman' をその任にあてたく思った。Chadwick の期待ははずれ、彼は事務局長 (secretary) に任ぜられた。

憤懣やるかたない彼は、しかしながら、その職にあつて、自ら草した新法



を厳密に執行した。これが成功すれば、19世紀イギリス最大の改革——中央政府が地方行政に直接介入するイギリス史上初の試み——をなしとげるはずであった。反対は、まずそれまで救済にあっていた地方の役人から上った。また、中央委員会の年次報告書の中で、いまだ新法の適用をうけず、旧法下で様々な工夫をこらしながら経費節約をなしとげた教区の業績が、まるで新法下のコミッショナーの手でなしとげられたかのように記録されているのである。そして、例えば次のような、およそ事実とはかけ離れた自画自賛の表現が頻出するのである。

The poor in the Union workhouse are amply provided for: their diet is wholesome, substantial, at the same time fully sufficient. Their cleanliness is a matter of great consideration; they receive the utmost attention, when needing it, from the very able Medical Gentleman who superintends the medical department. Their clothing is suitable; their moral and religious improvement duly attended to; and their general comforts most indubitably exceed by far what they could possibly enjoy elsewhere.<sup>14</sup>

実態を知らぬ人であれば、報告書はまるで夢のような成功をもたらしたと思うであろう。およそ事実や国民感情とは無関係の、中央委員会にとって都合のいい成果のみが採択されて報告書が作成され、これをうけて新法の成功がうたわれたという感じである。知識人の間では新法の実効は高く評価されていたが、実際には『タイムズ紙』がその非人道性をあばきたてるように、例えば1836年の不作と大雪の年にも、中央委員会の規定は万事にわたって杓子定規に運営され、多くの悲惨なエピソードを残している。容赦なき融通性の欠落、弱者の切りすて、そしてくだらぬ役人の行きすぎとおろかさが、新法成功への大きな障害となったようである<sup>15</sup>。

*Oliver Twist* は、下院に救貧院の特別調査委員会が設置される1837年2月に第一分冊を出した。やがて激しくもえ上る「新救貧法」反対運動の火つけ

役をはたすかのように、いかにも世論沸騰の好機をねらいすまして出版された感じである。Dennis Walder<sup>16</sup>によれば、「新救貧法」の苛酷さを批判する『タイムズ紙』の論点は、功利主義の考え方とキリスト教文明の求めるものとの対立を中心に展開しており、*Oliver Twist*の最初の数章は多分に『タイムズ紙』の報道に強く影響を受けたものであろうという。様々な情報の大部分および自分の基本的立場を、若き Dickens はこの有力な新聞紙上から引き出し、しかも作品の中では、新制度をおしつける教区役員会の人々を“very sage, deep, philosophical men”（Ⅱ, 11）と書いているが、この展開のしかたは『タイムズ紙』が *Oliver Twist* の紹介記事をのせた2月2日号の音調・態度とほぼ同一であることを指摘している。多分 Dickens は、新法の非人道的性格を鋭く批判し、その様々な運営のあらわれを糾弾する、人民のチャンピオンたる『タイムズ紙』に共感をよせていたにちがいない。

Dickens は救貧院に関する多くの事実を小説の中に組み入れるにあたり、教区の救貧役員会を功利思想の代弁者とし、しかも“the gentleman in the white waistcoat”（Ⅱ, 13）にみられるように、すべて貧民無用の単細胞精神の持主にしたてている。救貧院長は太っちょで健康そうだが、無能なる人間、そしてこうした人々の間を行き来し、様々な雑役をこなす Bumble は、権威をたてに弱者をおどし、いためつける下司役人である。四方八方、みわたす限り功利思想と無能と虐待のまかり通るおそろしい世界に、弱々しい、腹をすかせた少年犠牲者がなげこまれる。人道主義に訴える基本構想は、多分に『タイムズ紙』の、功利主義に対する人道主義の立場に啓示を受けたものであろう。

かくして冒頭にのべた有名な、しかし哀れを誘う場面がうまれた。H. House<sup>17</sup>ののべるごとく、*Oliver Twist*においては、救貧院のひどい食事、Bumble の如き役人のくだらなさ、そして子供への配慮の欠如に攻撃の中心がおかれている。

その食事メニューであるが、Somerset House にいる3名の中央委員は、

救貧院内の食事規定を全国一律にするため、1836年、国内のいたるところの救貧院からメニューを集め、その中から6つを選び、これを各ユニオンに送

SELECT COMMITTEE ON ANDOVER UNION

No. 3—DIETARY for Able-bodied Persons above 9 Years of Age

	BREAK FAST			DINNER					SUPPER	
	Bread	Gruel	Cooked Meat	Vegetables	Soup	Bread	Cheese	Bread	Cheese	
	oz	pints	oz	lb	pints	oz	oz	oz	oz	
Sunday	{Men	6	1½	—	—	7	2	6	1½	
	{Women	5	1½	—	—	6	1½	5	1½	
Monday	{Men	6	1½	—	—	7	2	6	1½	
	{Women	5	1½	—	—	6	1½	5	1½	
Tuesday	{Men	6	1½	8	—	—	—	6	1½	
	{Women	5	1½	6	—	—	—	5	1½	
Wednesday	{Men	6	1½	—	—	7	2	6	1½	
	{Women	5	1½	—	—	6	1½	5	1½	
Thursday	{Men	6	1½	—	1½	—	—	6	1½	
	{Women	5	1½	—	1½	—	—	5	1½	
Friday	{Men	6	1½	—	—	7	2	6	1½	
	{Women	5	1½	—	—	6	1½	5	1½	
Saturday	{Men	6	1½	5	—	—	—	6	1½	
	{Women	5	1½	4	—	—	—	5	1½	

Bacon:

った<sup>18</sup>。これが原則となり、食事は画一となって、以前よりはるかに質素なものになった。各地から、食事をもっとふやしてほしいとの要求が、院内の人々及び救済にあたる役人からなされた。*English Historical Documents* (11巻, p. 710)にその6種が掲載されているが、それは男性のみについての規定食であるので、女性と子供の量をみるために、Andover Union の例をここにあげてみたい<sup>19</sup>。

9歳以上の子供は女性と同様、それ以下は“dieted at discretion”となっている。これでみる限り Oliver が入れられた救貧院の「一日3杯のうす粥と、週に二度の玉葱、そして日曜日には巻パン半分」(II, 15)というのは、確かに誇張であろう。だが1837年に設置された特別調査委員会の報告には、その前年におこった Fareham 救貧院の事例がある。他の救貧院から教育をうけるべく送られた3人の幼児の兄弟が、寝小便をした罰として食事を半減され、しかも一週間後予期に反して餓死しなかったので、今度は足かせをつけて立たされ、他の子供達が食事するのを激しい空腹に耐えながらみていなければならなかった。やがて体が臭くなってくると庭の小屋におり重ねるように投げこまれ、まさに死ぬ間際になって、Fareham では 埋葬費節約のため、もとの救貧院に送り返したというのである<sup>20</sup>。Oliver のケースを誇張だと片づけるには、あまりに酷似した実例である。

おそらく Dickens は、新救貧制度の典型的な欠陥を諷刺し、批判するにあたり、最もひどい例に依拠しつつ、地名も人名も削りとり、これを単純かつ劇的な場面に構成した。粥のおかわりを求める場面は、シチュエーションの設定においても、ペイソスの力においても、同情を喚起させずにはおかぬすばらしい場面であり、あらゆる時代と民族をこえ、人間らしい生き方を求める、ほとんど原型とよぶにふさわしい場面となっている。人道主義の訴えは、ここにみごとに成功しているといえるであろう。

一方、救貧院の役人の愚鈍さ、おろかさをあばき、制度がいかにもひどい状態で運営されているかを、いろんな場面を通して提示する方法は、すぐれた

諷刺を生みだしている。つまり制度のひどさを、役人の人道的性格の欠落に還元し、その醜さと権威失墜を描くことで救貧院制度の批判にかえているのである。その代表が、‘beadle’ とよばれる下級役人で、とりわけ弱者にはひどく威張りちらす Bumble 氏である。

‘beadle’ とは、巡査の下働きをして、しばしば法律文書を作成したり事情説明のため法廷に出るかと思えば、また教区民生委員の下で、救貧税を集めたり、浮浪者・乞食の類を教区から追い出したり、といったいろんな雑役に従事し、これといって定まった任務をもたぬ役人である。わかりにくい職業なので Webb 夫妻の記述をここに引用しておこう。

He was to clear the streets of vagrants and beggars for the Constable; to help the Overseers to collect the Poor Rate, carry out the removals of paupers to their settlements, and prevent householders harbouring lodgers from other parishes; to keep order, under the direction of the Churchwardens, in the church and churchyard during Divine Service; on behalf of the Vestry Clerk to “cry” the notices of Vestry meetings and announcements of decisions there arrived at—in short, to be on hand whenever any superior officer of the parish required an assistant, a messenger, or a porter<sup>21</sup>

この Bumble 氏、“*oratorical power*” にかけては得意とするところで、様々な雑役をやっていればこそ法律用語を随所にちりばめ、自らを尊大視し、弱者には罵詈雑言をふんだんにあびせることもできるわけである。時折は、“If the law supposes that, . . . the law is a ass—a idiot” (LI, 399) なる名句をひねり出すこともあり、こわい役人ながらその能弁と作品中における滑稽な役割ゆえに、なかなか憎めぬ人物である。救貧役員から「黙れ」と命令されて驚愕し、こんな偉い人物に失礼な命令を下すとは、“A moral revolution!” (III, 21) だと断じるあたり、これはもう喜劇人物である。Oliver を Sowerberry のところへつれてゆく時など、涙ぐむ Oliver の姿を

みて憐れさを禁じ得ず、「このやっかいな咳め」と咳にかこつけて人情味をみせる瞬間もある。

「善きサマリア人」をあしらった金ボタンをつける Bumble は、慈善事業にたずさわる役人とはいえぬほどに、行状は醜い。やがて彼は beadle 職を去り、「誇り」と「神聖」の象徴たる帽子、コート、チョッキを脱ぎ、一介の男性になり下り、救貧院長となって Mrs. Corney と結婚する。この下降は更に惨めな下降を招き、やがて妻の尻にしかれ、ぐうの音も出ぬ臆病な人間となる。開巻数章の、抑制のきいた功利思想批判は、すっかり形をかえ、作品の後半部では、この下級役人のあわれな末路を追うにすぎない。権威を失った Bumble は、もはや愚かな人間にすぎず、作品の暗い世界の中でコミック・リリーフを果たしているといつてよいであろう。それはまた、読者にある種のカタルシスを与えすらすらするのである。そして、それでもなお満足しないのであろうか。Dickens は最終章において、彼を自分がかつて威張りくさっていた救貧院の収容員として、ぶちこんでいるのである。

救貧院の諷刺は、開巻数章をこえて展開されることはなかったが、それは作品の秀れた一部分をなしており、それだけをとり出しても、当時英国中に反感をまきおこした残忍な功利思想の、みごとな作品化であるといえるであろう。

最後に一言つけ加えたい。この作品には、救貧院の諷刺という大きな目的のほかに、「新救貧法」の下にあってはじめて可能なプロットがくみこまれている。新法下では男女それぞれ別棟に収容するので、従って以前には厳しかった私生児の父親詮索が不必要となり、廃止されたのである<sup>22</sup>。それゆえ Bumble 氏は Oliver 出生の秘密をさして探索しようともせず、その謎の展開は、作品の残る大部分に託されている。

その秘密は12章になって、Oliver が Brownlow 氏の邸に飾られている肖像画に釘づけになる場面ではじめて提示される。肖像画の女性の目は“sor-

rowful”で、Oliver は “It makes my heart beat. . . as if it was alive, and wanted to speak to me.” (XII, 80) とのべている。これは、Hamlet に父王の亡霊の姿をありのままに描く Horatio の言葉と同じである。Dickens はこの有名な場面を利用して、この肖像画の女性が Oliver の母であることを読者に暗に伝えているのである。そして作品はこの時点より、身元判明を尋ねるロマンスへと脱却してゆく。

そしてまた一方では、救貧院ではろくに祈りの仕方も教えられず、「Oliver のような罪から私達をお守り下さい」という子供達の祈りを聞かされていた Oliver であるが、彼は Brownlow 邸にあっては天に祈り (XII, 78)、Maylie 邸では聖書を学んでいる (XXXII, 239)。悪の世界に生まれ育ちながら、無垢の心を失うことなくキリスト教世界に帰依してゆく点では、作品は *The Pilgrim's Progress* のパタンをふまえているといえるかもしれない。

作品全体の構成はいまだ未熟であるが、*Oliver Twist* はつきぬ興味を与えてくれる、不思議な作品である。それは、作品中の「闇」の世界が単なる誇張や絵空事ではなく、ジャーナリストの真実追求の精神で貫かれ、一見グロテスクであったり、戯画であったり、滑稽な描写だと思われるものが、実際には時代の生々しい事実を伝えているからである。しかも、そうした特殊性も、作品中ではいつしか時代のコンテクストをはなれ、普遍的な情趣を醸成してゆくのである。事実とフィクションの分明定かならざるところに、作品の形容しがたい魅力が存在するのである。

#### 注

- 1 Charles Dickens, *Oliver Twist*, The Oxford Illustrated Dickens (1949; rpt. London: Oxford University Press, 1964), ch. II, p. 12. 以下、テキストの引用は章・頁数を ( ) 内に示す。
- 2 John Ashton, *Modern Street Ballads* (London: Chatto & Windus, 1888), pp. 351-2.
- 3 Leslie Shepard, *The History of Street Literature* (London: David & Charles, 1973), p. 179.

- 4 John Frederick Archbold, *The Magistrate's Pocket-Book* (London: John Richard & Co., 1839), p. 18.
- 5 John Ashton, *Gossip in the First Decade of Victoria's Reign* (London: Hurst & Blackett, 1903), pp. 85-6.
- 6 Charles Hindley, *Curiosities of Literature* (1871; rpt., London: The Broadsheet King, 1966), p. 89.
- 7 *The Third Annual Report of the Poor Law Commissioners for England and Wales* (London: Charles Knight and Co., 1837), p. 56; *Annual Register, 1837*, p. 131.
- 8 *The History of The Times; Vol. 1, 1785-1841* (London: The Office of The Times, 1935), pp. 293-300.
- 9 "New Scheme for Maintaining the Poor," *Blackwood's Edinburgh Magazine*, 43 (April, 1938): 489-492.
- 10 Ian Anstruther, *The Scandal of the Andover Workhouse* (Gloucester: Alan Sutton, 1984), pp. 105-7; John Knott, *Popular Opposition to the 1834 Poor Law* (London: Croom Helm, 1986), pp. 237-43; Sidney and Beatrice Webb, *English Poor Law History, Part II* (1927; rpt., London: Frank Cass, 1963), pp. 163-4.
- 11 *History of The Times*, p. 294.
- 12 M. E. Rose, "The Anti-Poor Law Agitation," J. T. Ward ed., *Popular Movements, c. 1830-1850* (London: Macmillan, 1970), p. 90.
- 13 Ian Anstruther, *ibid.*, ch. 9.
- 14 *The Third Annual Report of the Poor Law Commissioners for England and Wales* p. 52; *Annual Register, 1837*, p. 141.
- 15 Ian Anstruther, *ibid.*, xiii.
- 16 Dennis Walder, *Dickens and Religion* (London: George Allen & Unwin, 1981), p. 47.
- 17 Humphrey House, *Dickens World* (London: Oxford University Press, 1941), p. 96.
- 18 George Nicholls, *A History of the English Poor Law, II* (1854; rpt., London: Frank Cass, 1967), p. 315.
- 19 Ian Anstruther, *ibid.*, p.86.
- 20 *Ibid.*, pp. 33-35.
- 21 Sidney and Beatrice Webb, *The Parish and the Country* (1906; rpt., London: Frank Cass, 1963). pp. 126-7.
- 22 "The Acts relative to the liability and punishment of the putative father, and punishment of the mother of a bastard child, are repealed..." (Summary of Sections 69, 70 & 71 of the Poor Law Amendment Act), Nicholls, *ibid.*, II, p. 278.



Synopsis

The New Poor Law of 1834  
and *Oliver Twist*

Takao Saijo

The scene of Oliver asking for more claims universal admiration. A hungry boy asks for another bowl of thin gruel for mere survival, thus opposing the rigid workhouse system that is firmly controlled by the utilitarian spirit. The situation evokes in us a strong sense of sympathy towards the boy and a strong strong sense of horror against the system. What is written about the workhouse system in the early chapters of *Oliver Twist* seems to be based on well-founded facts, slightly exaggerated perhaps, but largely confirmed by street-literature, newspaper articles, and the annual reports of the Poor Law Commissioners and their interpretations.

The ballads such as "The Workhouse Boy" and "Baby Farming" have the same humanitarian appeal to the general public as *Oliver Twist*. The broadsheet, entitled "The Poor Law Catechism," tells the spirit of the workhouse system, which regards the inmates as convicts. Even the atrocious words of Mr. Gamfield the chimney sweeper cannot be disposed of as exaggerations, when we read a police case of 1839, cited by John Ashton in his *Gossip*. But the most powerful agent for exposing the ill administration of the New Poor Law was *The Times*. Its owner and its editor, out of the humanitarian concern towards their fellow

people, fought against the new law continually from the days of the parliamentary debate in 1834. And young Dickens seems to have taken "most of his information as well as a confirmation of his basic position from *The Times*" (Dennis Walder).

What Dickens did in the novel based on this topical issue of the time, was to put in contrast utilitarianism and humanitarianism, and to expose the brutal facts of how small boys in a workhouse were bullied, starved, and disposed of under a callous philosophy. Poor Oliver's diet might have been an exaggeration, but a factual example which the Select Committee of Inquiry found in Fareham Workhouse in 1837 testifies that the situation was very similar.

All such facts are deftly controlled as general truths, and without giving the specific name of the place, thus avoiding the poignancy of the satire, Dickens succeeded in portraying a situation that can enjoy a wide appeal. His satire is directed not towards the system itself, but towards the idiotically cruel individuals who administer the system in the workhouse. This is most apparent in the case of Mr. Bumble, who in the course of time falls from the height of pride and dignity to the bottom of human misery, as an inmate of a workhouse.

Although the workhouse satire occupies only a portion of *Oliver Twist*, it is an admirable piece and a well-timed tract, which might have helped to ignite the anti-Poor Law agitation that flared up in 1837-9.